

標示板と巡る昔日の首里

—歴史を学ぶため、まちを歩く人々との出会い

遠藤 なつめ

一 はじめに

私は修士論文執筆に向けた調査のため 2024 年、2025 年に複数回沖縄県的那覇市を訪れた。那覇市内を散策すると度々目に触れるのが、(写真 1) のような石でつくられた案内板である(以降、これらの石製の案内板を標示板と呼ぶ)。この標示板は、1995 年に那覇市歴史博物館の施策として設置された「那覇市旧跡・歴史的地名標示板」である。2026 年現在、歴史博物館の「史跡・旧跡マップ」¹では 117 か所が記載されている。県外から訪れた私はその標示板を見るたびに、記された過去の那覇市²の姿に感嘆しつつも、観光・調査を目的とした来訪者のためのものだろうと、当初さして関心を抱いていなかった。しかし、後に出会う人びとによってそのような考えは大きく覆された。

¹ 那覇市歴史博物館 史跡・旧跡マップ <https://www.rekishi-archive.city.naha.okinawa.jp/spot>
2026 年 2 月 18 日最終閲覧

² 史跡・旧跡に定められている建造物や施設、街路のほとんどは現在の那覇市制定以前には建てられていた。しかし、これらの標示板は那覇市歴史博物館によって 1995 年以降に設置され、現在の那覇市が設置範囲になっているため、ここでは「那覇市の姿」と表現する。



写真 1 首里当蔵町に設置された標示板 (2024年10月31日、筆者撮影)



写真 2 当蔵の標示板周辺 (2024年10月31日、筆者撮影)

二 那覇市旧跡・歴史的地名標示板

私が初めて標示板に目を留めたのは、2024年11月のはじめに那覇市に訪れた時であった。(写真1)の標示板は、沖縄県立博物館に所蔵される絵図とともに、その地の名前の由来や県の文化財に指定された経緯が記載されている。(写真2)は周辺を撮影したものである。複数の団体の案内板が集まっている様子が見られるが、案内の内容はそれぞれ異なる。

(写真3)、(写真4)、(写真5)は首里金城町の標示板とその周辺の様子を写している。金城町の石畳を下りきった、金城川沿いに設置されていた。川沿いの道路は多くの車が走る一方で、人通りはほとんどなかった。標示板には金城橋と南方に広がる識名平が描かれた屏風図と現在の地図が並べて載せられている。



写真3 首里金城町の標示板 (2024年11月2日、筆者撮影)



写真 4 案内板と金城橋 (2024年11月2日、筆者撮影)



写真 4 案内板の隣に設置されている重修金城橋碑文 (2024年11月2日、筆者撮影)

絵図や周辺地図が記載された案内は、私にその地の歴史を伝えてくれた。しかし、標示板を読むために立ち止まる人はほとんどなく、外部者のためにつくられたささやかなガイドに過ぎないのだろうと、私の記憶の片隅に追いやられていった。

三 首里を「見て歩く」

私の標示板への印象が大きく変わったのは、2025年夏の調査時のことであった。修士論文提出を控えた私は、首里城の復興事業に関わる人びとへの聞き取りのために、那覇市内をあちこち訪ねて回っていた。沖縄県立博物館で行われていた首里城復興に関する県職員の講演会にて、聴講者のひとりに声をかけた。聴講者のAさんは首里や首里城に関する市民団体に所属し、首里地域の史跡や旧跡を歩いて巡る活動をしているという。Aさんのご厚意で、後日その団体の定例会に参加させていただくことになった。

那覇市内の会議室で行われた定例会は、男女合わせ13人程度の人びとが集まっていた。普段は室内の活動だけでなく、実際に史跡・旧跡を見るため、首里のまちを巡り歩いているという。その日の定例会は夏の暑さを考慮し、室内での資料の読み合わせが行われていた。読み合わせに使われる資料は、2016年に団体自身が発行したものであった。ただ記載された内容を音読するだけではなく、過去の地名や石碑は沖縄方言で読むことが意識づけられ、土地の成り立ちや歴史について議論する場面も見られた。私が驚いたのはこの資料の各所で挿入される写真に標示板が含まれている、ということであった。標示板の板面がアップで写されたものだけでも、およそ8か所の写真が挿入されており、その多くは現存しない首里の有力者の邸宅や、街中の石碑のそばにあった。周囲と同じような住宅街の一角で歴史を伝える標示板は、首里の歴史に関心を持った人びとによって注目され、散策の目印にされていた。

四 標示板から歴史を捉えなおす

その地の過去の姿を私に教えてくれた標示板は、決して外部者のためだけのものではなかった。同じ市内の関心をもった人びとにとっては、歴史を学びなおす目印にもなっているのである。

標示板が石でつくられ、絶えずまちに佇んでいることも、決して無関係ではないだろう。団体の人々は、資料を携えて実際にまちを歩き、過去の景観に思いを馳せる。その時、古い絵図が描かれた標示板と、同じ場所の現在の様子を一度に目に映すことで、現在と昔日の景観は重なり合う。標示板は紙資料に記載されるものと異なり、移動できず雨や風にさらされても存続する。さらに、標示板は景観の一部として紙の資料に記される。那覇市歴史博物館によってつくられた標示板が、市民に読まれ改めて歴史を認識する大きなきっかけになり得る。

行政によってつくられた標示板が、市民の活動にいかに関わって行くのか。短い滞在期間では、捉えきることはできなかった。しかし、日夜その場にあり続ける標示板は行政と市民、双方による歴史の再認識の鎧になり得る。Aさんと参加させていただいた団体の皆様との出会いが、私に教えてくれたのである。

謝辞：本稿における2025年8月9日から9月5日の調査は東京都立大学社会人類学教育基金による調査研究旅費支援を受けたものです。

(えんどう・なつめ 東京都立大学大学院)